

激に堅穴住居跡数が増大し、一〇世紀中頃には二〇〇軒を越える大集落が形成されている。篠ノ井遺跡群は洪水の奔流の直撃をうけるような低地にあるのに対して、南宮遺跡は洪水の被害を受けにくい微高地に位置している。このことが当該時期における両遺跡の様相の違いとなっている可能性が考えられる。とくに南宮遺跡の一〇世紀の集落景観は、同時期の他地域の遺跡の様相と比べても特異であり、仁和の洪水によって生産域、生産手段を失った人びとを吸収していったことが推測される。

三 信濃国府の移転問題

『和名類聚抄』所載の郷数などから、仁和の洪水災害の被害をうけた千曲川沿いの六郡は、信濃国全体の約三分の二近くの人口および生産力を占めていたと推定される。それらの地域が深刻な被害に見舞われたとすれば、古代信濃国の行政上にも大きな影響があったものと考えられる。信濃国府の所在地については、国分寺が建立された八世紀後半には小県郡にあり、その後、筑摩郡に移転したという見解が『長野県史』を含めほぼ定説とされている。しかし、国府に関連する遺構等が確認されていないため、その移転時期については不明とされてきた。『日本三代実録』仁和三年五月二〇日癸巳条の出羽国府移転問題にみられるように、災害が国府の移転契機になりうるとすれば、信濃国府も仁和の洪水をその契機とし、行政の建て直しなどをはかるため被害の少ない筑摩郡に移転したという可能

性が考えられる。

おわりに

過去の災害が地域とその社会にもたらした変動を明らかにすることは、災害が現代社会に多大な影響を及ぼすことを経験した私たちにとって大きな意義がある。本報告はそのための一助としてまとめたものである。

黄庭堅跋 李公麟「五馬図巻」について

高野 絵莉香

「五馬図巻」は北宋の政治家・李公麟によって描かれた画卷である。この画卷には精巧な筆致によって、西域諸国から北宋に献上された馬五匹が描かれている。巻末には黄庭堅自筆の跋文も付されており、貴重な北宋の書画作品と言えるだろう。李公麟唯一の真筆と言われるこの画は、長らく中国にて伝わり、清朝内府蔵となった後、辛亥革命後の混乱期に日本に流出し、実業家の末延道成の手に渡ったと考えられるが、第二次世界大戦中に消失したと言われる。現在、私達がこの画卷を見るためには戦前に撮影された写真に頼るしかない。しかし、これらの写真の間で、同じ作品であるにもかか

わらず、馬の順番や鑑蔵印の有無など、いくつかの差異があることに気がついた。本発表では、「五馬図巻」の様式など美術史的な考察ではなく、この「五馬図巻」の写真的差異がどのような原因で生まれたのか、また「五馬図巻」がどのようにして日本へ伝来したのかという問題を、近代中国と日本における文物流出、流入の視点から扱った。

現在確認できる「五馬図巻」の図版は三種類ある。一つ目は『國華』三八〇号、三八一号（國華社、一九二二年一月、二月発行）、二つ目は、卷子本『李公麟五馬図』（大塚巧藝社、出版年不明）、三つ目は原田謹次郎『支那名画寶鑑』（大塚巧藝社、一九三六年）である。これらは馬の配列や印の状態、跋の有無などいくつかの点において差異が認められる。『國華』本と卷子本では、三匹目と四匹目の順番が入れ替わっており、また卷子本には『國華』本にはない宣統帝溥儀の印「無逸齋精鑒璽」が現れている。検討の結果、『國華』発行から卷子本出版の間に改裝が行われていることが判明したが、特に問題なのが「無逸齋精鑒璽」の有無である。この問題を明らかにするために、まず一番年代が早い『國華』本がいつ、どこで撮影されたのかを検討したところ、東洋美術史家の中川忠順が宣統帝の傳育長官であった陳寶琛宅で「五馬図巻」を見し、写真を撮影した可能性が高いことが判明した。ここで新たに問題になるのが、内府の蔵品である「五馬図巻」が何故、個人の陳寶琛宅にあったのかということである。

高官に対する文物の貸出記録、溥傑への下賜分のリストをまとめた『故宮已佚書籍書目録四種』を調査したところ、陳寶琛は「辛酉（一九二二年）十月十八日」から同年「十二月初四日」まで「五馬図巻」を内府から借りていたことが分かった。さらに、内府に返却された「五馬図巻」は一九二二年十一月に皇弟、溥傑に下賜されたことも判明した。溥儀の自伝『我的前半生』によれば、イギリス留学の資金を集めるために、弟の溥傑に下賜するという名目で、千三百点ほどの書画類を天津のイギリス租界の建物に持ち出させ数十点を売ったとあり、「五馬図巻」も天津で売られ、何らかの経緯で日本にまで渡ってきたと考えるのが妥当であろう。以上のことから、『國華』本に見えず、その後の卷子本に現れる「無逸齋精鑒璽」は陳寶琛の「五馬図巻」返却から翌年溥傑に下賜されるまでの間に押されたと推測することができる。また、検討の過程で、陳寶琛は借りだした「五馬図巻」を、大阪毎日新聞社の海外視察員として中国に派遣されていた芥川龍之介に見せていたことも判明した。

次に天津からどのような経緯を経て、日本へ、そして末延道成の手に収まったのかを検討した。そこで注目したのが当時、中国で活躍した日本の古美術商達である。その中のひとつ、博文堂の店主である原田悟朗の聞書に大変興味深い証言を見つけた。彼によれば、陳寶琛の甥である劉驥業が「五馬図巻」を日本にもたらしたのだと言う。劉驥業は遊ぶ金欲しさに、内府の蔵品を担保にし、原田から金を借りていたことも分かった。天津で売られた、とは名ばかりで

いくつかの品物は陳寶琛と劉驥業の手に入り、遊興費を稼ぐために日本に売り飛ばされたということが、この証言から想像することができる。しかし「五馬図巻」がその後、どのような経緯で末延道成の手に渡ったのか、現段階で明らかにすることはできなかった。

本発表では、消えた幻の名画「五馬図巻」の各図版に違いがあることを出発点として、近代中国と日本において書画がどのように扱われ、流出、流入したのか、という問題に触れることができた。特に、中盤で述べた陳寶琛が書画の鑑賞を通じて日本の名士と交流を持っていたという事実は、中国の書画を取り巻く歴史を考える上で大変興味深いものがある。宋代に確立した、文人たちの書画を媒介とする交流の伝統に、連なるものと考えられよう。中国の文物は時に政治的な役割を担ったが、変革の時代の中、「五馬図巻」もまた宮中から流出し、日本へと辿り着いた。今回は近代における事例に留まったが、文物の持つ政治性を評価し、美学的対象としてのみならず、歴史学の対象として、如何に活用することができるといふ、より大きな議論へと本発表の成果を還元したい。

宋と遼の諜報組織とその運営について

—宋の対遼諜報組織を中心に—

洪 性 珉

宋と遼は、「澶淵の盟」を結んでから一二〇年余の平和が続けられていた。しかし、盟約を結んだ直後に宋の真宗は、遼に対する諜報活動を続けることを命令している。本報告では宋遼関係の中で諜報活動の意味について考察する。

1. 宋の諜報機構（安撫司下部の諜報機構を中心に）

景德三年（一〇〇六）になると、雄州に河北縁辺安撫司が設置されて、軍事などの北辺と関わる業務や軍政を担当する機構となり、安撫使は知雄州が兼任した。雄州以外の河北地域は、軍の管理を武将個人に委託していた。それが慶暦五年（一〇四五）の保州兵乱、慶暦七年（一〇四七）の貝州兵乱によって問題となり、安撫司が慶暦八年（一〇四八）には、河北地域に四つの安撫司が設置されることになった。

機宜司は、安撫司の下で諜報活動を担当する部門である。「雄州機宜司」は、澶淵の盟以降、遼国の使者が宋に入って交聘する事を掌る「国信司」に改められた。一見、諜報組織が無くなったように思われるが、大中祥符三年（一〇一〇）四月からは雄州の間諜の存